

ドイツ近代社会にみるエイジングとジェンダー

原 葉 子 (お茶の水女子大学人間発達教育研究センター)

社会の高齢化は先進国共通の問題となって久しいが、現在われわれの意図する「高齢者」や「エイジング」という概念はどのように成立してきたのか。こうした社会的な概念は、規範となって、国家や社会における該当者の位置づけに大きく影響してきたのではないか。さらに、そこにジェンダーの問題はどのように絡んでいたのか。こうした問題関心から、報告者は今年度、近代ドイツをフィールドに、社会保障制度と医療という2つの軸において、エイジングとジェンダーの交叉点にある力学を考察した。なお、近代ドイツ社会を扱っている理由は、公的年金制度をドイツが世界に先駆けて導入し、整備していったこと、また、19世紀後半から20世紀初頭の医学においてドイツ医学が牽引的な位置にあったという点にある。

(1) ドイツ社会国家における遺族年金制度の導入をめぐる規範・ポリティクス

ドイツでは1889年に公的年金制度が制定されたが、そこではおもに長期的かつ継続的に雇用される男性熟練労働者にもっとも適合的なモデルが導入されていた。この時点では、こうした年金制度は現在のような「引退生活」を営む高齢者を想定してはいないが、少なくともそれまで廃疾と同義であった老齢を、独立したカテゴリーとして扱おうとするものであった。しかし、こうした制度的な「高齢者」の差異化は、女性の場合にはより複雑な要因を伴う。1911年に年金制度に組み込むかたちで遺族年金が導入されたとき、そこに浮上した差異化ファクターは、世代と階層であった。こうして女性の場合、「高齢者」の社会的定義は男性とは異なるかたちで、あるいはより曖昧なかたちで、行われていくことになる。

(2) 女性のエイジングに対する医学のまなざし

19世紀の医学は、人間の人生段階や発達過程を規定するディシプリンのひとつとなり、女性の老いもまた男性医師のまなざしを通して定義されていた。しかし、世紀転換期になると、女性への知の解放がはじまり、ジェンダー秩序の揺らぎが起こる。そのなかで、女性のエイジングに新たな意味づけをしようとする動きが出てくるが、こうした再定義は逆説的に新たな抑圧を生んでいくことになった。